



Title	ろう教育で語られるリテラシー : その背後にある言語観
Author(s)	中島, 武史
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ろう教育で語られるリテラシー ～その背後にある言語観～

中島武史

はじめに

一般的に「ろう教育」と呼ばれている、聞こえない・聞こえにくい身体をもつ子どもたち¹への教育分野がある。ろう教育関係者は、この教育が開始されてから現在に至るまでの間、ろう児に対する教育手段についての議論を積み重ねてきた。それは、手話・口話論争²や手話・手話論争³として知られている。しかし、そのような異なる立場からの論争がある反面、どのような立場の教育手段を用いるとしても常に重視されてきたものがある。それが日本語の「読み書き能力」である⁴。本稿で問題とするリテラシーという用語の典型的な意味はこの「読み書き能力」のことであり、これは「機能的リテラシー」とも呼ばれている。ろう教育の関係者は、ろう児の「読み書き」能力という機能的リテラシーを、彼女ら彼らの自立につながる重要な柱として認識し、その育成を一貫して進めてきた歴史的な経緯がある。

他方、ろう教育に限らず、近年ではリテラシーという用語の使われ方が多様化している。メディア・リテラシー、情報リテラシー、エモーショナル・リテラシー、数学リテラシーなどを目にしたり聞いたりすることが多くなり、関連する書籍も数多くある。それら〇〇リテラシーの個別名称をあげていけば際限がないが、メディア・リテラシー、情報リテラシー、エモーショナル・リテラシーなどは、何らかの媒体によって伝達される情報を収集し、読み手が批判的に、また内省的にその意味を理解または解釈し、それらを適切に活用するという大枠では一致した特徴がある。本稿では、この種のリテラシーを「批判的リテラシー」と呼び、語彙や文法の観点を中心に読み書き能力を見る「機能的リテラシー」と区別する。リテラシー研究においては「機能的リテラシー」という起点理解から、適切な情報の収集や活用と読み手の視点を含めた「批判的リテラシー」へと徐々に裾野を広げており、本稿が焦点化するろう教育という分野においても、リテラシーは機能性から批判性までを含む概念として記述されるようになりつつある。

¹ 以下、本稿では「ろう児」と記述する。

² ろう児と教員が手話を使用する教育方法を「手話法」と呼び、ろう児の発声や読話技能をもとに進められる教育方法を「口話法」と呼ぶ。手話を否定するか、部分的に採用するかなど、この二つの教育方法の是非が頻繁に議論されてきた。

³ 「手話」という用語を言語学の観点から見た場合、日本語に対応した形で手指表現を行う「日本語対応手話」と、日本語とは異なる独自の構造をもつ「日本手話」という異なる二つの形態に分類できる。そして、環境さえ整えばろう児が第一言語として習得できるのは「日本手話」とあり、日本手話による教育がなされるべきであるという主張が存在する。その主張の過程で、「日本語対応手話」を否定する傾向も見られるが、一方で「日本語対応手話」も必要だという意見も存在し、手話・手話論争として理解されている。

⁴ 斎藤(2006)は、コミュニケーション方法の多様化や教育方法論としての対立意見もあるが、読み書き能力習得の重要性については共通した認識があると述べている。

本稿では、ろう児のリテラシーについての先行研究を追いながら、リテラシーをろう児に獲得させるための方法論の移り変わりをはじめにおさえる。その後、ろう児のリテラシーが示す内容について医学系と教育系とに整理分類し、ろう児のリテラシーが現状ではどのように認識されているのかを示す。その後、ろう児のリテラシーを調査する際に先行研究が土台としている「日本語」の位置づけについて考察する。

1. リテラシー獲得の方法論から見たろう教育史

日本におけるろう教育の開始は、1878年開校の京都盲啞院（現在の京都府立聾学校）にさかのぼることができる。本節では、まずろう児への読み書き能力という意味でのリテラシー、つまり機能的リテラシーの教育がどのような変遷をたどったのか見ていく。以下本節は、小田（2002）を参照している。

京都盲啞院を創設したのは古川太四朗という教育者である。ろう教育の黎明期に行われていた教育は口話法を採用しておらず、手話を用いるものだった。口話法が広まる以前の、当時のろう教育において、読み書き能力という意味でのリテラシーを育成する方法は「筆談」であった。古川以後の重要人物たちである、伊沢修二、小西信八、石川倉次らは発音指導や聴覚活用もろう教育に取り入れるが、その効果は期待されたようなものではなく、結局は書きことばと手話中心の指導法が1900年前後の状況であった。

口話法普及に奮闘した川本宇之介、橋村徳一らは、口話を通して語彙や語法を習得させることを狙い、読唇による「理解」を優先させ、文字優先の教授法には強く抵抗した。それは、話し言葉から入るという意味で聴児の学習過程をなぞる手法であった。

1960年代のろう教育は、補聴機器による聴覚活用が進められた。この聴覚口話法では、高いレベルの音声言語コミュニケーションが、それまでネックであったろう児の語彙の少なさ、また生活体験等と言語を結びつけると期待された。また、1960年代後半に始まった京都府立聾学校のキュードスピーチや栃木聾学校の同時法的手話は、それらの教育手段の核が日本語である限りは手を使ってもかまわないという思考である。どちらも日本語の音韻体系に沿って開発されており、発話との同時表現を目指したものである。これらは開発の段階で、日本語の仮名文字との対応が難しくなく、書きことばへの移行が容易であると考えられた。

1960年代以降続いている聴覚口話法を経て、近年では手話による絵本の読み聞かせが幼稚園や小学部段階で見られる。これらは、直接的に語彙や文字習得に寄与するわけではないが、物語の把握や読むことへのモチベーションとなり、手話と日本語の二言語間で学習の転移が起こるという見方に支えられている。さらに、公教育としてではなく私設のろう教育団体による活動も見られるようになった。龍の子学園（現在の明晴学園）では、手話言語を最大活用し、発話や読話には頼らない。手話によるテキストの理解や手話・指文字と文字の対応に比重を置いた指導である。

以上、リテラシー獲得方法の歴史変遷をまとめれば表1のようになるだろう。小田は同

論文で、バイリンガルの視点が出るまで、聴覚障害児の読み書き能力の育成は、聴児の読み書き能力育成と同様に扱われ、そこで議論されていたのは日本語の形式の入力についてであり、聴覚障害児には入力されにくい日本語の形態をいかに入力しやすくするかという試みが口話であり聴覚活用であるとしている。

表1 ろう教育におけるリテラシー獲得方法の変遷

1878年~1900年頃	書きことば（筆談）		
1910年以降~ ↓	話しことば（純粋口話法：読話や発声の技術）		
1960年以降~ ↓	聴覚活用（聴覚口話法：補聴機器の登場）		
	1960年後半 手指表現併用（キュードスピーチ / 同時法的手話）		
近年	聴覚活用 （手話なし）	聴覚活用 （手指併用）	手話言語

次節以降は、ろう児のリテラシーの中身を「機能的リテラシー」と「批判的リテラシー」に分けて、いくつかの先行研究を引きながら整理する。

2. 機能的リテラシー

ろう児の読み書き能力という意味での「機能的リテラシー」は、ろう教育分野だけでなく、身体障害という観点においてろう教育と関連する医学分野でも扱われている。まずは、医学分野の先行研究として『音声言語医学』47で特集された<先天性難聴児に対する言語指導の50年の歩みとこれから>を概観する。なお、本稿では聞こえない・聞こえにくい子どもたちを「ろう児」としているが、引用部分に関しては各先行研究の記述通り「聴覚障害児」などの名称を使用する。

2.1 医学分野での機能的リテラシー - 補聴機器の効果と言語力 -

井脇（2006）は人工内耳装用児の聴取能と言語発達の経過についての研究である、語音聴取評価CI-2004のオープンセット課題である学童用日常生活文の検査結果から、聴取明瞭度は、低年齢で手術を受けた人工内耳装用児の群において経過とともに改善が見られた、しかし文意理解の結果は聴覚正常児に比べて困難な傾向が見られ、語彙検査の結果も正常児に劣ることが示された、それらの結果から、人工内耳は発音を明瞭にし、一対一でのコミュニケーションが容易になるという聴覚補償の点で画期的な技術であるが、この点だけに目を奪われず、得られた聴覚を読み書きの力につなげる視点が必要だと述べている。

斉藤他（2006）は補聴器装用児の言語訓練の成果と問題点の検討のために、先天性感音

難聴児60名を対象に小学校就学時の言語評価を行った、WISCの知能検査から、言語性IQが動作性IQと同程度までには到達しないケースが観察され、言語性IQが優位に低い症例が32%あった、また、ITPA言語学習能力診断検査では「文の構成」について46%の症例が成績不良であり、失語症構文検査では61%の症例が成績不良という結果が示され、助詞や受身文の聴覚的理解が不足している症例が多く、文法の正確な理解が困難な症例が多いことが示唆された。

鈴木（2006）は従来のリハビリテーションの成果を検証し今後を見通す目的に沿い、成人となった聴覚障害者に対して質問紙法と面接法での調査を行っている、調査対象者の多くは統合教育（インテグレーション）を経験しており、高校卒業後は進学している、調査の結果、全体の7割が成人知能検査法であるWAIS-Rの言語性課題で標準以上であったが、6割弱で動作性に比べて言語性が低く、本来の認知能力に見合う言語力が獲得されていないことが示唆された、また、聴覚障害重度例においては半数が言語性課題と読書力検査の成績が低かった、そして、今後のリハビリテーションが考慮すべき点として、重度例の日本語獲得、書記言語リテラシーの重要性が挙げられた。

今回取り上げた医学分野の先行研究からは、少なくともA、Bの知見が示されていると言えよう。

- A. 聞こえについての能力である聴取能は、人工内耳の早期装用によって高まる。しかし、聴取能の高まりが日本語の語彙習得や文意理解を聴覚正常児と同等にするわけではない。
- B. 小学校就学時点の聴覚障害児（補聴器装用）のなかには、文の構成や文法理解の点で成績不良のものが少なくない。成人聴覚障害者のなかにも、言語性IQが不十分なものが一定数存在し、重度の聴覚障害者の日本語獲得が特に課題である。

2.2 ろう教育分野での機能的リテラシー - 読み書き能力を支える各構成要素の評価 -

次に、ろう教育の領域で行われているろう児の「機能的リテラシー」についての研究について整理する。ただし、ろう児の機能的リテラシーについては、ろう教育のなかの「言語指導」というテーマで膨大な蓄積があり、網羅的な概観は紙幅の都合もあり難しいため、いくつかの先行研究への言及に留める。

佐藤（2009）は、聴覚障害児にとって使いにくい動詞とは何かという着想から、動詞産出の特徴とその過程について考察した、文脈の制約の強弱によって「入れる - つっこむ」のように産出される動詞は異なる、制約のゆるい「入れる」のような動詞を「包括動詞」、制約の厳しい「つっこむ」のような動詞を「限定動詞」とし、聴覚障害児と健聴児のそれぞれの使用差を比較したところ、聴覚障害児の場合は限定動詞の算出数が少なく、より汎用性の高い包括動詞の算出傾向が強いことがわかった。

相澤（2009）では、先行刺激が後続する刺激に影響を与えるというプライミングの手法

を用いて、言語処理の観点から聴覚障害児の統語情報処理を調査した、この結果から、格助詞の統語情報の言語処理は健聴児と同様に生起しているが、意味情報の言語処理は健聴児と同様には生起していないことが示唆された、これは、聴覚障害児にとって統語の理解は比較的難しく、意味情報の理解はより容易であるとする先行研究を反証する結果であった。

ろう教育分野では、ろう児の機能的リテラシーの特徴を明らかにするため、ろう児の語彙力や文法力の諸側面を個別要素的に研究するケースが多く、上記以外にも、ろう児の受動文使用の頻度や種類、誤りの特徴を調査した澤（2012）など多数の先行研究がある。なかには、長南（2003）のように手話を活用して機能的リテラシーを高めようとする実践的研究も見られる⁵。ろう児の読み書き能力における機能的リテラシーの到達度や特性などの諸側面については、これまでの膨大な先行研究によって多くの知見が得られているが、諸研究に通低して言及されている見解としてC、Dが挙げられるだろう⁶。

C. 全般的な聴覚障害児の読み書き能力は、健聴児に劣る傾向にある。

D. 聴覚障害児の読み書き能力には、大きな個人差がある。

3. 批判的リテラシー - 手話言語がもたらすメタ言語機能の活用 -

ろう児の機能的リテラシーが、ろう教育分野と医学分野の双方から研究されているのは異なり、ろう児の批判的リテラシーは手話言語と密接に関わりながら述べられることが多く、ろう教育分野に限定された議論である。批判的リテラシーについて焦点化したわけではないが、ろう児のリテラシーを手話言語と結びつけて論じた代表的なものに鳥越（1999）がある。ここでは、聴児の話しことばが単純に書きことばに移行しているのではなく、話しことばのなかに具体的な文脈に対応して表出される「一次的話しことば」と、文脈に依存せず論理的に組み立てられる「二次的話しことば」があり、「二次的話しことば」の育成が書きことばに繋がるとする岡本（1985）の理論を援用し、手話の二次的ことばの育成が音声語リテラシーの獲得を促進する可能性があるとした。

ろう児の批判的リテラシーについて言及しているものとして小田（2002、2006a）、武居（2003a、2003b）、鳥越（2008）が挙げられる。彼らの議論における一つの共通点は、Paul(1998)を参照していることにある。そこでは、リテラシーの重要な側面として「読解的側面 (Reading-Comprehension Framework)」以外に「批判的読みの側面 (Literacy critical Framework)」があると主張されている。「読解的側面」とは、知識や情報は読み手の外側にあるテキストのなかに存在するもので、語彙や文法の理解からなる bottom-up 的な能力である。一方「批判的読みの側面」とは、読み手がつ知識や置かれている文化

⁵ ろう学校高等部に在籍するろう児 20 名に対し、日本手話と日本語対应手話を目的別に組み込んだ指導プログラムに沿って語彙指導を行い、その効果を検証している。結果は、手話表現能力が高いろう児ほど指導プログラムの効果が高く、名詞と副詞の学習において特に指導効果が表れたとされている。

⁶ 澤（2004）、斉藤（2006）、佐藤（2009）、鄭（2009）など。

環境、時代状況によってテキストの意味が内省的に解釈されるという top-down 的な能力である。この「読解的側面」とは、読み手を起点とした理解という視点を含めることから、本論で述べている「批判的リテラシー」と一致する。

武居（2003a、2003b）では、手話言語が「読解的側面」に貢献するということが主張されている。つまり、手話言語の十分な育成を図り⁷、獲得した手話言語の能力や知識をメタ言語知識として top-down 的に活用しながら批判的リテラシーを高め、bottom-up 的に獲得する機能的リテラシーと補完的に機能させながら日本語のリテラシーを獲得させるという思考である。手話言語によるメタ言語能力を、国語の授業実践に活かす研究としては、鳥越（2003）や長南⁸（2000）がある。

4. 小括 - ろう児のリテラシー研究の動向 -

ろう児のリテラシー育成方法の変転を縦断的に見た場合、それは手話使用を否定しないろう教育黎明期の筆談指導に始まり、読話と発語指導に代表される口話技能へと移り、聴覚活用による時代に至る。現在では、聴覚活用だけでなく手指の併用が加わり、手話言語によるアプローチも見られるというような多様化の時期を迎えている。また、リテラシーの中身を横断的に検討した結果、「機能的リテラシー」の側面は医学分野とろう教育分野にまたがって研究されているが、「批判的リテラシー」についてはろう教育分野のなかでも特に手話言語という概念を明確にしている先行研究に顕著であり、図1のようにまとめることができるだろう。

図1 医学分野とろう教育分野におけるリテラシー種の分類

		医学	ろう教育		
		(聴覚口話)	(聴覚口話)	(聴覚口話+手指併用)	(手話言語)
リテラシー	機能的リテラシー (読み書き機能)	○	○	○	○
	批判的リテラシー (批判・内省的読み)				○

ろう児のリテラシー研究の動向を大局的に捉えれば、狭義の読み書き能力である「機能的リテラシー」への注目が高い。ろう児の機能的リテラシー研究におけるろう教育分野の

⁷ 武居（2003a）は、手話獲得を「コミュニケーションとしての手話」、「今ここを越えた記号としての手話」、「言語としての手話」の三段階に分けており、「コミュニケーションとしての手話」を「一次的話しことば」に、「今ここを越えた記号としての手話」を「二次的話しことば」に対応するものとしている。

⁸ 手話が物語の記憶と理解に与える効果について、日本手話と日本語対应手話の違いと読書力という2つの要因から考察した。課題文は事実レベルと心情レベルの質問に分けられており、日本手話の提示効果は読書力を問わず事実レベルと心情レベルの解答に見られた。一方で、日本語対应手話の提示は読書力が低位のろう児の事実レベルにおける解答のみに効果的であることがわかった。長南は同論文ないで批判的リテラシーについて言及していないが、これは日本手話のトップダウン的な指導の効果として見ることができるだろう。

特徴は、彼女ら彼らの読み書きの機能性の発達程度を明らかにすることに加えて、語彙習得や文法理解の過程や方略が健聴児と比較してどの点が同じで、どの点で質的に異なっているのかを明確にしようとするところにある。同様に医学分野研究では、ろう児の聴覚を通じた音声日本語の刺激と機能的リテラシーとの関係を究明しようとする特徴が挙げられる。特に、補聴器や人工内耳の装用によって得られた聴取能が機能的リテラシーをどれくらい高めるのかという視点や、機能的リテラシーの習得度合いを聴力の程度や補聴機器の種類や装用時期などの変数から考察するという傾向が見いだせる。

一方で、「批判的リテラシー」の重要性が指摘されるようになってきたのは、おおむね2000年前後からである。それらは、小田（2002）が指摘するように社会の情報化という現象が背景にあるだろう。FAXやメール、インターネットなどの情報技術の普及にともなうろう児・ろう者の書記日本語との接点は確実に以前より増加した結果、文字情報を読み解く読み手の存在がリテラシーに含まれ理解されるようになった。また、読み書きの力を個人内の特徴（機能的リテラシー）としてのみ把握する視点からは、ろう児のリテラシーの実態を十分に捉えきれず、生活に根ざし社会に広く開かれた能力としてリテラシーを捉え直す必要が生じているという主張⁹も要因として指摘できるだろう。このように、読み手の存在と社会とのつながりをも考慮し、リテラシー概念に取り込むことは、社会的な認知を得るようになった手話言語とろう児のリテラシーについての議論を接近させたと考えられ、ろう児の批判的リテラシーの研究が、手話言語の活用という方向性に集中している理由が推察できる。

5. 考察 - 機能的リテラシーと批判的リテラシーの足元 -

ろう児のリテラシーを考える際に、狭義の読み書き能力を示す機能的リテラシーだけでは不十分であり、ろう児という読み手の存在と、ろう児の生活に根ざした社会までをつなげて理解しようとする批判的リテラシーを取り入れていくことは重要である。前節で見たように、ろう教育において批判的リテラシーが語られる場合、それは手話言語とかがかわる形で議論されており、これまで得られている知見から手話能力の育成がろう児のリテラシーという観点からも重要視されることになる。この手話能力の育成を大事にするという考えは、手話言語そのものを大事にするということでもあり、手話否定の長い歴史をもつろう教育史においては画期的な出来事である。ただし、だからと言って機能的リテラシーをbottom-up的に高めながら、批判的リテラシーによるtop-down的読みを効果的に取り入れることでろう児に書記日本語（書きことば）を獲得させようとする試みが無批判に受容されるわけではなく、そこにも指摘されるべき点はある。それは、リテラシーの育成によって獲得が目指される「日本語」自体の固定した姿である。

書記日本語の能力は、ろう児にとって獲得が容易ではないことは繰り返し述べられてお

⁹ 鳥越（2008）

り、特に機能的リテラシーを対象とする研究において顕著であるように、各種の言語検査や知能検査で成績不良とされるろう児は少なくない。しかしこれまで、これら諸検査が想定している話者の基準について考えられたことはあるのだろうか。結論から言って、各種の諸検査は、第一言語として日本語を習得している、聞こえる身体をもつ日本語モノリンガル話者が基準として設定されている。つまり、ろう教育分野や医学分野で重ねられているリテラシーについての議論は、それが機能的リテラシーであっても、批判的リテラシーであっても、現在の日本社会で主流である日本語の獲得を最終的には目指していることに変わりはなく、ろう児のリテラシーについての研究は、日本語モノリンガルとの比較のうえで良/不良が決定されていると言える。ろう児のリテラシー議論の足元は、第一言語としての日本語という言語観で固められている（図2）。

図2 ろう児のリテラシーとその土台となる言語観

		医学	ろう教育		
		(聴覚口話)	(聴覚口話)	(聴覚口話+手指併用)	(手話言語)
リテラシー	機能的リテラシー (読み書き機能)	○	○	○	○
	批判的リテラシー (批判・内省的読み)				○

土台となる言語観	第一言語としての日本語（日本社会の主流言語）
----------	------------------------

モノリンガル基準の日本語という言語観の上に無自覚に立ってしまう限り、機能的リテラシーも批判的リテラシーも、結果的に第一言語としての日本語習得を目指す議論に回収されてしまう。例え、批判的リテラシーの育成が手話言語を擁護することにつながっているととしても、書記日本語獲得のための手話言語としてしか理解されず、手話言語そのものの尊重にはつながりにくくなる可能性が指摘できる。

おわりに

現在なされているろう児のリテラシーについての議論では、日本語は無色透明なものとして存在している。ろう児に人工内耳のような情報技術を駆使しても、同年齢・同発達段階の聴児と同等の日本語を獲得するわけではないという先行研究結果があるように、ろう児は聴児と同様には日本語の読み書きが進展しにくいという共通認識がある。しかし、そうであるならば、今ある日本語の形を当然視せず、日本語が、あるカテゴリーの人たちに与える困難さについても議論していく方向性は考えられないだろうか。聞こえる身体を持ち、なおかつ定型発達の日本語モノリンガル話者という基準値に到達していないろう児が多く存在している状況を裏返せば、日本社会の主流言語である日本語によって、ろう児

が社会から排除されているとも解釈可能であろう。今後は、ろう児のリテラシーを語る際にこれまで当然視されてきた日本語そのものの内実にも目を向ける必要があると考える。

最後に、日本語自体への視角をもってろう児のリテラシーを語るための一つの方策としてバイリンガル・バイカルチュアルろう教育を挙げる。そこでは、手話を第一言語として確保したうえで第二言語としての書記日本語習得が目指される。日本では、私立明晴学園がバイリンガル・バイカルチュアルろう教育に取り組んでいる。バイリンガル・バイカルチュアルろう教育は、第一言語として手話言語を重視する点で特徴的であるが、このアプローチで習得が目指される「第二言語としての日本語」の中身は今のところ判然としない¹⁰。しかし、明晴学園の教員である岡（2013）では、日本語教育のなかで議論が深まっている「やさしい日本語」をもとにした日本語指導をろう児に行ったと報告しており、今ある日本語を不動のものとして、日本語から人に歩み寄るといった視点がろう教育にも導入される契機となるかもしれない。

参考文献

- 相澤宏充（2009）「どのように文を理解するのか」四日市章（編）『リテラシーと聴覚障害』コレール社：186-193
- 井脇貴子（2006）「人工内耳装用児の聴取能および言語発達の経過について」『音声言語医学』47：298-305
- 岡典栄（2013）「ろう児への日本語教育と『やさしい日本語』」庵功雄・イヨンスク・森篤嗣（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか - 多文化共生社会を実現するために -』ココ出版
- 岡本夏木（1985）『言葉と発達』岩波書店
- 小田候朗（2002）「聴覚障害教育におけるリテラシー観の変遷に関する研究 - 新たなリテラシー観の構築に向けて -」国立特殊教育総合研究所研究紀要 29：1-10
- 小田候郎（2006）「聴覚障害児のリテラシーとコミュニケーション」『聴覚・言語障害児のリテラシーの向上を目指して - コミュニケーションを重視した指導と教材 -』独立行政法人国立特殊教育総合研究所：1-7
- 齋藤佐和（2006）「コミュニケーション方法とリテラシー形成(特別発言)」『音声言語医学』47：332-335

¹⁰ 明晴学園のHP（2015/03/22 現在。http://www.meiseigakuen.ed.jp/#）ないにある、小学部の教育課程では、日本語について以下のように説明している。（以下では、書式の都合により筆者が表記を一部修正している。）「第二言語としての日本語を適切に運用し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、日本語に対する関心を深め日本語を尊重する態度を育てる。」また、中学部では以下の通りである。①日本語の表現・理解について：国語の「書くこと」「読むこと」の内容に基づいて、日本語を読む力、書く力などを磨く。②日本語の文法について：国語の「言葉の特徴やきまりに関する事項」に加えて、日本語教育における「日本語文法に関する事項」も学ぶ。③日本語の物語・文学について：国語の「伝統的な言語文化に関する事項」に基づいて、日本語の文学や古典を楽しむ。

- 斉藤宏・工藤多賀・堀内美智子・小寺一興 (2006) 「補聴器装用児における乳幼児期の言語訓練の成果と問題点」『音声言語医学』47 : 306-313
- 佐藤敦子 (2009) 「どのように単語を使うのか」四日市章 (編) 『リテラシーと聴覚障害』コレール社 : 179-186
- 澤隆史 (2004) 「聞こえの障害と言語の発達 - 聴覚障害児の読み書き能力を巡る諸点と研究課題 - 」『聴覚言語障害』33 (3) : 127-134
- 澤隆史 (2012) 「聴覚障害児における受動文の産出 - 作文における受動文の使用とその特徴 - 」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』63 : 89-96
- 鈴木恵子 (2006) 「聴覚障害児の長期経過・診断から成人まで」『音声言語医学』47 : 314-322
- 武居渡 (2003a) 「手話とリテラシー - ろう児の指導法をめぐって - 」『教育學研究』70 (4) : 536-546
- 武居渡 (2003b) 「ろう児の第二言語習得」『言語』32 (8) 大修館書店 : 49-57
- 長南浩人 (2000) 「聴覚障害者の物語の読解に対する手話表現付加の効果」『特殊教育学研究』37(4) : 61-68
- 長南浩人 (2003) 「聾学校高等部生徒の日本語の語彙指導における手話使用の効果」『特殊教育学研究』41(3) : 325-334
- 鄭仁豪 (2009) 「どのように文章を理解するか」四日市章 (編) 『リテラシーと聴覚障害』コレール社 : 193-200
- 鳥越隆士 (1999) 「ろう教育における手話の導入」『兵庫教育大学研究紀要』19 : 163-171
- 鳥越隆士 (2003) 「聴覚障害児童に対する国語指導のための手話教材ビデオ制作の試み」『兵庫教育大学研究紀要』23 : 97-107
- 鳥越隆士 (2008) 「聴覚障害児のリテラシーの発達と支援 : 手話活用の視点から」『兵庫教育大学研究紀要』33 : 39-51
- Paul, Peter V. (1998) Literacy and Deafness -The development of reading, writing and literate thought-. Allyn and Bacon.